

## 編集後記

今年も、意義深い3月16日に紀要第4号を発刊することができた。本号は見ての通り本学の創立者でもある池田大作先生の研究を中心としたものである。創価教育研究センター設置の目的のひとつが「池田研究」であるが、これまで本格的な研究になかなか着手できなかった。その事情は神立孝一センター長の講演（本号所収）に詳しいので割愛するが、とにかく創価大学で池田研究が開始されたことを卒直に喜びたい。論文6本、研究ノート2本、講演5本、そして海外の池田研究の動向についての報告が1本と、内容的にも充実したものができたと自負している。

執筆者は、筆者も含めて全員が他に専攻領域をもつ者で、池田研究については素人といっている。しかも研究対象である池田先生は尊敬する師匠であり、お元気にご活躍されている現役の方である。そのような方を研究するという発想自体、筆者にはなかった。池田先生を研究するとは、どういうことなのか。具体的にどうすればいいのか。当初、執筆者たちは（少なくとも筆者は）とまどいを隠せなかった。

紀要第3号の発刊後、池田研究のテーマをそれぞれ決め、資料を読み、中間報告会で他のセンター員の意見を聞くなどしながら、約1年をかけて原稿を仕上げた。学問的に耐えうるような内容にするために四苦八苦した。全員が同じような苦勞をしたと思う。それが今、紀要として結実し、心の底からホッとしている。まだ本格的な研究は緒についたばかりだが、これからの池田研究の源流となれば幸甚である。

紀要の編集にあたっては、様々な方にお世話になった。特に毎回の講演会のテープ起こしをしていただいた駒野晃司さん、翻刻・索引の校正を手伝っていただいた江沢敏和さん、そして英文目次を作成いただいたオリピエ・ウルパンゴ夫妻には、この場を借りて心から御礼申し上げたい。

筆者は編集委員として全ての原稿に目を通すという機会を与えられたが、不勉強の筆者にとっては初めて聞く話も数多く、大変に勉強になった。

最後になってしまったが、創価教育研究センターの篠原誠顧問が昨年7月に急逝された。篠原顧問は創価大学開学当初から大学建設に携わってこられ、大学の歴史をよくご存知の方である。当センターも篠原顧問から貴重な資料の提供を受けたり、あるいは大学史の証言者としてお話を伺ったりなど、陰に陽にお世話になってきた。当センター主催の講演会でも「創立者と学生」（『創価教育研究』創刊号に掲載）、「戸田城聖と学生——東大法華経研究会50周年記念」（同第2号に掲載）と題して話しをしていただいた。今となっては本当に貴重なものといえよう。また有意義で楽しい思い出でもある。センター関係者一同、謹んでご冥福をお祈り申し上げるとともに、ご遺族の方々にお悔やみを申し上げる次第である。（T. K.）